

研究会「エイコス」創立のころ

橋 本 能

研究会「エイコス」がはじまってからすでに50年になるという。振り返れば隔世の感を覚える。創立当時のことを述べよと言われても、なにぶんにも半世紀も前のことで、記憶違いもあり、話が前後するかもしれないが、ご容赦願いたい。

研究会を始めるきっかけは、当時、早稲田大学の岩瀬孝先生と中央大学の戸張智雄先生の共同執筆で17世紀の悲劇論を出そうという話が持ち上がった。パリ大学で博士号を取られて帰国したばかりの伊藤洋先生がこの企画に参加された。大学院生もお手伝いをする事になり、その相談の席で、戸張先生門下の皆吉郷平氏とはじめてお目にかかった。結局、この企画は頓挫したが、コルネイユを専門とする共通性から、皆吉さんから親しくしていただくことになった。

当時、僕は修士論文のテーマにコルネイユを選んでいたが、どう取り組んでいいのか、四苦八苦していた。皆吉さんに相談したところ、17世紀のテキストを読む会を開いていただくことを伊藤先生にお願いしてみようということになった。伊藤先生は快くお引き受けくださった。これが研究会のもととなった読書会のスタートである。月ごとだったか、二週間ごとだったか覚えていないが、土曜日に定期的に先生の研究室にお邪魔して、テキストを読む会を開いていただいた。

読書会の趣旨は、とにもかくにもテキストを正確に読むことを旨とした。僕がコルネイユの喜劇を修士論文に選んだことから、はじめに選んだ作品はコルネイユの喜劇『メリット』*Mélite*だった。17世紀演劇を選んだのはいいとしても、大学院に入学したての僕にとっては、当時の作品はまるで歯が立たなかった。いまでも赤面ものだが、先生はまるで箸にも棒にも掛からない僕の訳に辛抱よく付き合ってください、訳を直してくださった。伊藤先生からそれこそフランス語を教えていただいたようなもので、17世紀のフランス語と現代フランス語の違い、当時の文法、そして作品の読み方まで教えていただいた。

余談になるが、17世紀演劇の読み方については、講演会で伊藤先生が、バロック演劇は単に文学ではない、テキストだけではとらえきれない、テキストとそこから舞台の関係性を読み解くことが必要だとおっしゃっていたのを覚えている。読書会で、メレの『名高き海賊』*L'illustre Corsaire*の主人公が素性を隠して他人の振りをする場面を読んでいて、舞台上で演じられた時の面白さに気づき、先生の言葉に納得がいったのを覚えている。

最初は皆吉氏と僕の二人だけだった読書会に、慶應大学の神保剛氏、早稲田大学の大学院生の関谷苑子氏、野池恵子氏も加わった。『メリット』の次に、伊藤先生のご執心のロトルーの『死にゆくエルキュール』*Hercule mourant*を読んだ。テキストは、先生のお持ちだったマイクロ・フィルムを起こしてコピーしたかと思う。その間、読書会の進め方について話し合ううちに、17世紀演劇の原点としての1630年代ということが浮かび上がり、その時代の作品を集中的に読んでみようという方

向性が決まった。

現代に出版されたテキストは、コルネイユ、モリエール、ラシーヌを除いて、当時は現在に比べてごくわずかだった。また、フランス国立図書館（BN）の Gallica にも、17 世紀の演劇のテキストはほとんど見当たらなかった。テキストを集めるにあたって、ランカスターの『17 世紀フランス劇文学史』 *A History of french dramatic literature in the seventeenth century* をもとに、BN のカタログから 1630 年代の作品の図書番号を拾い出した。費用は主に伊藤先生の研究費を使わせていただき、早稲田大学図書館から BN にマイクロ・フィルムを注文していただいた。フィルムが届くと、テキストのコピーを必要な部数だけ作った。作品は少なく見積もっても 50 作以上になる。メレ、ロトルー、バンスラード、デュ・リエ等々、当時ほとんど読まれたことのない作家の作品に次々とふれることができ、研究心をかきたてられる楽しい会となった。

やがて、参加メンバーが一人増え、二人増えするうちに、皆吉さんが雑誌発行を提案した。論文としてどんなに拙くとも、形式にとらわれずにほかで書けないことを自由に発表できる場を作ろうということだった。雑誌名は、戸張先生に教えていただいて、ギリシア語で「真実らしさ」を意味する「エイコス — 十七世紀フランス演劇研究 —」に決まった。印刷は、知り合いの梅本洋一氏の紹介で七月堂をお願いした。雑誌発刊にあたり、会の名称も「17 世紀仏演劇研究会」に決まった。こうして細々と始まった読書会は研究会としての形式が整って、今の「エイコス」が誕生した。

僕は定年退職を契機に研究会を退いたが、当時新進気鋭の研究者だった伊藤洋先生も、今や米寿を迎えられようとしている。最後になりますが、先生のご健勝と研究会のいっそうの発展をお祈りします。